

シルクロード都市の新発見

ーキルギス共和国チュー溪谷西部 における考古学踏査ー

1 はじめに

2018年9月、奈良文化財研究所とキルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所は、5年間の期限で考古学調査に関する研究協力協定を締結した。これにもとづいて、筆者は同年同月末より現地調査を開始した。これまでに2度の調査を実施したが、2019年度の調査時に、周壁をとまなう未知の大型遺跡を新たに確認したので、以下に概要を報告する。

2 調査概要

2018年以来、筆者は、シルクロード天山北路の形成過程をあきらかにする目的で、キルギス共和国北部に広がるチュー溪谷の西部において考古学踏査を実施している。カラバルタ市周辺の東西約35km、南北約50kmの範囲を調査対象とし、東西交通網と土地利用の変遷をより精確に見出すために、城内遺跡の悉皆的な記録をおこなってきた(図31)。チュー溪谷ではこれまでも遺跡踏査はおこなわれてきたが、いずれの調査も規模が比較的大きな遺跡を対象としており、シルクロードの形成過程や変遷を緻密に描く上で必要な、精細なデータに欠いていた¹⁾。

これまでの調査において、計52遺跡を記録した。初年度の2018年は地域の文化的・歴史的特性を理解することを目的としていたため、10ヵ所既知の遺跡を含む21遺跡を記録した。初年度の知見にもとづいて、2019年度は調査対象地域の北西部において重点的な踏査を実施し、31遺跡を記録した。このうちほとんどが新規確認の遺跡であり、大規模な都市遺跡のほか、城塞と思しき中規模遺跡、古テュルク時代の追悼遺構と思われる矩形遺構、墓地、墳丘墓(クルガン)群などを含んでいる。

3 新規に確認した城塞遺跡

2019年10月に実施した第2次調査の際に、調査対象範囲の北西端付近において、偶然にも未知の大型遺跡を確認した。本調査における番号割り当て規則にしたがい、以下では同遺跡をCV19029と呼称する。



図31 チュー溪谷における主要な都市遺跡の分布と調査対象範囲

立地と構造 CV19029は西のトク・タシュ川と東のカラ・スウ川の合流地点南岸平坦面に位置する(図32)。周囲は、遺跡から北北東約30kmの地点を北西方向に流れるチュー川に注ぐ小河川によって形成された沖積平野であり、平坦面が広がる。遺跡は平面不整五角形を呈しており、城壁が外周を廻る(図33)。現況目視可能な範囲は、東西約274m、南北約227mを測る。城壁は浸食により崩落して断面台形を呈しており、裾部で厚さ15m程度、高さは最基底より5m以上残存していると思われる。城壁上には、「塔」の痕跡と考えられる円形の高まりが少なくとも21ヵ所で認められた。南西・南東・東隅・北東隅・北西隅付近の他、北面・西面中央・南面中央では、やや大きめの「塔」が並ぶ。城壁の状態や内外の状況から判断すると、北面・西面中央・南面中央の「塔」状遺構は、元来の出入り口、城門であった可能性が高い。城壁の内側は、南西部にくぼみ、南東部にわずかな高まりが見られる他には地形の起伏は見られず、ほぼ平坦面を呈している。遺構の痕跡もとくに見られなかった。城壁の外側は、北・西・東面の城壁近くを小河川に囲まれる一方、南側は平坦地であり、現在は耕作地として利用されている。南側の耕作地内には比較的多くの土器片が散布していたことから、城壁外南側では何らかの活動がおこなわれていた可能性がある。なお、CV19029の北東には、カラ・スウ川を挟んで、南北に細長い丘上に多数の小規模なクルガンからなる墓域(CV19030)がある。この墓域の年代は、CV19029よりも古いと考えられる。

採集土器・年代 CV19029では、少数ながらも図示に堪える土器片を採集した(図34)。これだけで時期の確定は難しいが、内傾口縁を有するカップ(1)や口縁部がわずかに立ち上がる粗製無頸壺(調理具)(3・4)の存在から、おおよそ9世紀後半～10世紀後半の年代を与えることができるだろう²⁾。ただし、これらの資料の大部分は城壁外で採集されており、城壁内部の年代をそのまま示すとは限らないので、注意が必要である。



図32 CV19029遠景（北から、奥に見えるのは天山山脈）

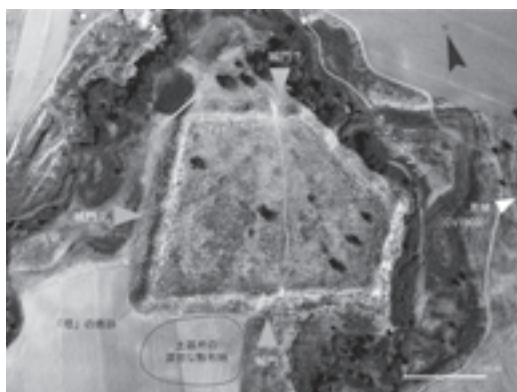


図33 CV19029鳥瞰（UAVによる、上空500mから撮影）

4 遺跡の構造と分布状況

遺跡の構造 シルクロード沿線に展開した都市遺跡は平面形にばらつきはあるものの、概して、①城壁に囲まれた中心部（シャフリスタン）、②シャフリスタンの隅部に位置する宮城（ツィタデル）、そして③シャフリスタン外の街区（ラバト）という3つの区域から構成されていた。これにもとづくと、今回確認したCV19029は①に相当する部分のみが認められ、②は存在しない。③は今後の調査で外城壁が見つければ、その存在を新たに追認することにもなろう。しかし、東隣には先行する時代の大規模墓地（CV19030）がそのまま残されており、果たしてこれを取り囲むようにして街区を形成していたかどうか疑問が残る。現在の手がかりは、CV19029の城壁外南方の耕作地に日用土器が多く散布していたことであり、現状では、城壁外南方を中心に小規模な街区を想定するのが無難であろう。

周辺遺跡の分布状況 6～11世紀の間、チュー渓谷内には少なくとも大小20余の都市が存在したことが知られている³⁾（図31）。このうち、シャフリスタンだけで数十haに達する大型の中核都市は4カ所（東から、アスパラ、シス・トベ／古代名ヌジケト、クラスナヤ・レチカ／古代名ナヴィカト、アク・ベシム／古代名スイヤープ）のみであり、これらの間の天山北路沿いに規模の小さな都市が分布した。また、シス・トベの東方約22kmに位置するペロボドスコエ・クレボストから北方のアク・トベ・スターリースコエに抜ける支線に数都市が存在していた。この支線は、9世紀以降に開通したルートと思われる。CV19029はこれらの交易路から外れた場所に位置している。

5 まとめと今後の課題

新たに確認したCV19029は、その規模・構造や立地に鑑みると、中核的な都市とは言えない。おそらく、9世

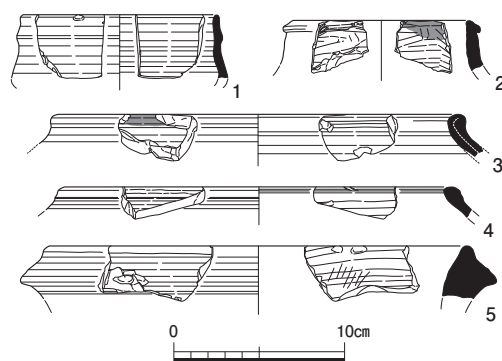


図34 CV19029採集土器 1：5

紀以降に開通した天山北路の支線と関係していたと考えられるが、遺跡近辺が未踏査のため、直接の証拠は得ていない。今後の調査でCV19029周辺を詳しく調べ、同遺跡の精確な時期や役割について考察を深めたい。

本稿の内容は、科研費若手研究（課題番号18K12560）の交付を受けて実施した調査成果の一部である。

（山藤正敏・Bakht Amanbaeva

／キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所）

註

- 1) Бернштам, А.Н. 1950 Труды Семиреченской Археологической Экспедиции Чуйская Долина. Материалы и Исследования по Археологии СССР No.14. Москва и Ленинград: Издательство Академии Наук СССР; Кожемяко, П.Н. 1959 Раннесредневековые Города и Поселения Чуйской Долины. Фрунзе: Академия Наук Киргизской ССР; Kyzlasov, L.R. 2010 The Urban Civilization of Northern and Innermost Asia: Historical and Archaeological Research. Bucharest: Romanian Academy, Institute of Archaeology of Iași.
- 2) 年代決定にあたり、以下の文献を参照した。城倉正祥・山藤正敏ほか「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015年秋期）調査出土遺物の研究－土器・瓦編－」『Waseda Rilas Journal』6、205-257頁、2018；櫛原功一「アク・ベシム遺跡の土器編年試案」『帝京大学文化財研究所研究報告』19、1-16頁、2020。
- 3) Горячева, В.Д. 2010 Городская Культура Тюркских Каганатов на Тянь-Шане (Середина VI -Начало XIII в.). Бишкек: Кыргызско-Российского Славянского Университета.